

# かしま医療過疎

## 島・へき地支える

人口約1万4千人の沖永良部島。島民の命を支える医師は和泊町、知名町合わせて10人余。その1人が和泊町の福山医院の福山茂雄医師(83)だ。

3年前の2007年3月。肺炎で入院していた60代女性の容体がどんどん悪化していった。診断や検査結果から、集中治療室(ICU)での管理が必要な超重症肺炎の恐れがあった。

「総合病院ですぐに精密検査が必要」と判断、沖縄県の自衛隊にへり搬送を要請した。間もなく到着したへりに自分も乗り込み、約1時間かけて同県立中部病院まで付き添った。女性は一命を取りとめた。

08年12月、医師、看護師が搭乗する沖縄県のドクターヘリの運航が始まり、沖永良部島をカバーするようになった。福山医師のへり搬送は減り、中部病院に女性を運んだ以降はない。

それまで、患者に付き添いへりに同乗したのは、100回ほど。助け

## ベテラン



福山茂雄医師 和泊町一和の福山老人保健施設の入所者の足を検査する

られた多くの命がある。一つ島民がいる。離島医療では、へり要請の判断を誤れば生命にかかわる。福山医師は

「検査結果、臨床判断をもとに決断する」と強調する。へりで沖繩へ飛んだ後は、船や民間機で帰島しなければならぬ。だが、今でも「夜間など必要ならいつでも乗っていく準備はある」と話した。

■ □ ■

最終後の1952年、内科医になった。沖繩での勤務を経て、56年に出身の沖永良部島に戻り、50年以上島の医療を引っ張り、住民の健康を見守ってきた。

開院当時、島の人口はおよそ2万6千人。医師は5人だった。朝から夜中まで患者が列をつくり、診察に明け暮れた。「あのころに比べれば、医師が増え、負担は減った」という。ただ、今も最新の医療機器が十分整っていないといえず、疾患、臓器ごとの専門医も少ない。

最近、医院は次女の上園敦子医師(55)が診察するようにになり、福山医師は医院に隣接する介護老人保健施設の入所者を診ることが多くなった。

それでも、1カ月のうち、1週間から10日ほどは外来・病棟で診察する。患者から「近く鹿児島市に行く」と聞けばすぐに紹介状を書き、総合病院での精密検査や専門

# へり搬送、今でも準備

医の受診を勧める。「島の医療には限界がある。すべての治療を島でできないのが残念」

■ □ ■

福山医師は05年4月、78歳で鹿児島大学大学院に入り、皮膚病の研究を始めた。その2年前、ダニの一種が皮膚内に寄生して発症する皮膚感染症「疥癬」が施設内で流行したのがきっかけだった。

大学院には、毎月1週間ほど島から通い、若い学生らと並び専門書、文献を読み込んだ。今年2月、疥癬の診断法についての論文を書き上げたばかりで、3月に博士課程を修了する。研究を支えたのは、成果を島の人たちに還元したい、という思いだった。